

形容詞を伴う結果構文と Make 使役構文の獲得について

On the Acquisition of Adjectival Resultative Constructions and Make-Causative Constructions in English

本多 明子[†]
Akiko Honda

[†]至学館大学
Shigakkan University
honda@sgk.ac.jp

Abstract

The aim of this paper is to explore how the English adjectival resultative construction acquires from the viewpoint of Usage-based Construction Grammar. This approach takes the primary unit of grammar is the grammatical construction, which is defined as a pairing of grammatical form and the corresponding meaning. This construction basically encodes the relationship between cause and effect. Although young children perceive the causal relationship in the early stage of development, this construction is almost nonexistent in this stage. Alternatively, periphrastic constructions like make-causative constructions are frequently used in their daily utterances. This paper shows the acquisition of the adjectival resultative construction in terms of Inheritance Network in the light of the difference in constructional property between the two constructions.

Keywords — Adjectival Resultative Construction, Make-Causative Construction, Acquisition, Inheritance Network

1. はじめに

英語には、使役構文 (Causative Construction) に属する結果構文 (Resultative Construction, 以後、本論文では、形容詞を伴う結果構文を指し、RC と表記する) と呼ばれる構文が存在する。

(1) He polished his shoes clean.

RC の構文特性については、言語学の領域である意味論、統語論、語用論など様々な観点に基づく研究により明らかにされている (Goldberg & Jackendoff, 2004; Goldberg, 2006; Levin, 2017 等)。その中でも特徴的な点は、RC は単文で複文構造を持つということである。複文構造とは、ここでは、二つの事象から成るということを表す。例えば、上記の例文は (2) のようになる。

(2) He polished his shoes causing them to be clean.

彼が靴を磨くという事象と、(磨いた結果) 靴が綺麗になったという二つの事象、即ち、原因事象と結果事象から成り立っている。

認知心理学で指摘されているように、二つの事象間における因果関係の認識については、発達の初期段階で認められる (Piaget, 1929, 1930)。RC は因果関係を表す構文であることから、幼児期に出現すると考えられるが、実際には、RC は、子どもの発話データベース CHILDES を調査しても、1歳から3歳 (女兒1名) の発話の中にその存在を確認し難い。それはなぜか。

また、近年、認知言語学の用法基盤理論、構文文法論 (Construction Grammar) の発展に伴い、構文の特性だけでなく、言語獲得を視野に入れた構文研究がなされるようになり、幼児期の発話表現がどのように文法構文として成り立っていくのかその過程が明らかになってきた (Tomasello, 2003)。さらに、構文文法論には構文間関係を示す継承 (Inheritance Network) という考えがあり、例えば、RC と形式的、意味的に類似する使役移動構文 (Caused-Motion Construction, 以後、CMC) との関係について、継承の観点から説明することが可能となった (Goldberg, 1995)。

本論文では、子どもの発話データベースである CHILDES の言語資料に基づき英語を母語とする女兒 Lara の1歳から3歳までの発話状況を調査し、原因事象と結果事象を表す際にどのような表現形式を用いるのかを調べ、RC を獲得するまでにどのような表現の獲得過程を経るのかを考察する。そして、その結果をもとに、上記の問いに対する理由について、構文間の繋がりを示す継承という考えに基づき説明する。

本論文の構成は次の通りである。第2節では、Lara の発話から原因事象と結果事象を表す表現形式を抽出し、分析結果を示す。第3節において、RC と MCC の構文特性の違いを述べる。さらに、事象間の因果関係を子どもは周りにいる大人の発話を耳にしたり、また、自らもそれぞれの行為を表す動詞や状態を表す形容詞

を使用したりしながら認識していくことを示す。第4節では、構文文法論の構文間の関係を示す継承について概観し、RCの獲得について考察する。第5節は纏めである。

2. Laraの発話状況

女兒Laraの発話を1歳から調べていくと、使役による変化でも、前置詞句や不変化詞を用いる位置の変化を示すCMCや動詞不変化詞構文(Verb-Particle Construction, 以後、VPC)の獲得は発達の初期段階で確認できる。

—CMC—

- (3) a. put her in it then. (1歳11ヶ月)
 b. daddy put it in the cooker. (2歳1ヶ月)
 c. shall I put it on fire place? (2歳5ヶ月)

—VPC—

- (4) a. put it away. (1歳11ヶ月)
 b. take bib off. (2歳1ヶ月)
 c. I want to put his t-shirt on. (2歳5ヶ月)

一方、前述したように、状態変化を示すRCの獲得は3歳における発話においても確認し難い。その代わりに、RCと同じく使役構文に属し状態変化を示すMake使役構文(Make-Causative Construction), 以後、MCC)の発話を2歳7ヶ月以降確認することができた。発話文は(5)である。

—MCC—

- (5) a. can you make mine bigger? (2歳7ヶ月)
 b. make it nice and clean. (2歳8ヶ月)
 c. make it bigger. (2歳9ヶ月)

動詞のmake以外にも、letやhaveを用いた使役動詞の出現も発話の中に観察される。

- (6) a. let me play with this then. (2歳8ヶ月)
 b. you have had your hair brushed. (2歳9ヶ月)

以上のことから、初期発話段階では、RCに比べるとMCCの使用が頻繁に見られる。以下では、RCとMCCの構文特性に着目し、この違いについて考える。

3. RCとMCCの構文特性の違い

認知言語学的視点から見ると、RCとMCCの構文特性の違いは幾つかあるが(拙論, 2004), ここで注目すべき点は、言語化される変化を引き起こす行為が具体的に明示されているか否かである。構文文法論の観点に基づくと、RCの形式と意味は次のように表される。

(7) 形式: [Subj V Obj RP]

意味: X causes Y to become Z_{state}

(Goldberg, 2006: 73)

尚、SubjはSubject, VはVerb, ObjはObject, RPはResultative Phraseを表す。一方、MCCの形式は次のようになる。

(8) 形式: [Subj MAKE Obj RP]

つまり、RCの場合には、RPで示される変化を引き起こす行為がその形式に記号化されているのに対して、MCCでは、具体的な行為が言語化されていない。MCCにおいて結果を引き起こす行為を言語化するのであれば、(9)のようになる。

(9) He made his shoes clean by polishing them.

つまり、手段を意味するbyと共に具体的な行為を表すV-ingの存在が必要となる。もちろんpolishという行為以外にも、例えば、brushやwashもそれぞれの行為の結果として、対象が綺麗になることから、(10)に見るMCCも可能である。

(10) She made her hair clean by brushing/ washing it.

それぞれの結果事象がどのような行為事象と有機的に結び付いているのかを認識するには、現実世界における様々な経験が必要となる。例えば、Laraの発話においてwipeとcleanが原因と結果の関係として結び付いている発話が父親(DAD)との会話の中に観察される。

(11) DAD: quick wipe.

CHI: can I wipe it?

DAD: if you want you wipe it you can give it a wipe for me.

CHI: wipe wipe wipe.

CHI: wipe wipe wipe.
 DAD: are you wiping?
 CHI: is this all clean?
 DAD: is it all clean.

(Lara 2歳6ヶ月)

但し, wipe という行為と clean で表される状態についての認識はそれ以前に遡る. wipe という動詞については, Lara が1歳9ヶ月の時に祖母 (ELS) の発話の中に確認することができる.

(12) ELS: oh dear.
 ELS: never mind.
 ELS: grandma will wipe that off in a minute.
 ELS: you do your jigsaw.
 ELS: grandma will wipe it in a minute.
 ELS: shall I go and get a cloth and wipe it?
 CHI: yes.
 ELS: alright then.

(Lara 1歳9ヶ月)

その後, Lara 自らも wipe を使用する発話が観察される.

(13) CHI: I wipe & a face.
 DAD: do you wanna wipe your face?
 (Lara 2歳0ヶ月)

また, 形容詞 clean についても, Lara に対する母親 (MOT) の発話の中に観察することができる.

(14) MOT: Lara?
 MOT: are you clean?
 CHI: Lara do.
 MOT: are you clean?
 CHI: yes.
 MOT: well.
 MOT: let's have a look at your hands then.
 MOT: and the other side.
 MOT: good girl.

(Lara 1歳11ヶ月)

さらに, (15) をみると, wipe 以外にも, Lara が wash という行為と clean との関係について認識していることがわかる.

(15) CHI: and you mustn't wash this.
 MOT: no.
 CHI: you mustn't wash the oven + gloves.
 CHI: they clean now.
 CHI: are they clean?

(Lara 2歳8ヶ月)

同じ頃, 動詞 wash 以外にも, Lara は sweep という行為が形容詞 clean で表された状態と結び付くことを認識している.

(16) CHI: I'm gonna sweep here now.
 MOT: pardon?
 CHI: I'm gonna sweep here.
 CHI: make it nice and clean.
 CHI: make it nice and clean.
 MOT: make it nice and clean.

(Lara 2歳8ヶ月)

用法基盤理論の考えによれば, 言語能力は一般認知能力を用いて純粋に言語使用からボトムアップ式に獲得される (Tomasello, *ibid.*). つまり, 日々の経験の中で実際の発話を聞いたり, 年齢が上がるにつれて読んだり, また, 自らもその言語表現を使用したりすることにより, 一つひとつの具体的な事例から文法構文が獲得される.

4. 構文間の継承関係

構文文法では, 一つひとつの構文の存在を継承関係により動機付け, 構文はネットワーク (inheritance network) を形成していると考えられる. 独立した構文間の結び付きを捉えることにより, それぞれの構文の特性を説明する. 構文間の関係は継承リンク (inheritance link) により捉え, 図1で示すように, 異なる構文 C_1 と C_2 の間に動機づけの関係 (relations of motivation) が見られる場合, 継承という考えにより, それらの構文の結び付きを意味的, 形式的に説明することができる.

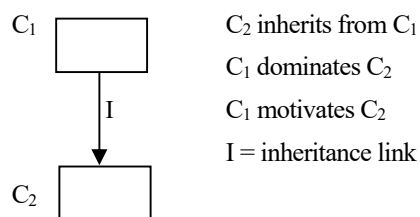


図1

(Goldberg 1995: 73)

以下では、RC と MCC の特性を踏まえ、構文間の継承の観点から RC と MCC の関係について示す。

まず、RC を構成する動詞について見てみると、先行研究で指摘されているように、動詞自体に使役の意味はない。Vendler (1967) の動詞分類に基づけば、RC を構成する wipe, sweep, wash, brush 等はどれも activity verb に属する。構文文法では、RC という構文自体に使役の意味があると考え、それぞれの動詞が RC に組み込まれることにより、使役の意味が出てくる。では、そもそも RC の使役の意味はどこから出てくるのか。

RC の構文的な特徴は、先にも述べたように、単文で複文構造を成すという点である。つまり、RC は、因果関係を構成している原因事象と結果事象の二つの事象を一つの形式で記号化している。この点が MCC とは異なる。Lara の発話に見るように、MCC の場合には、結果事象のみを言語化している (例, make it nine and clean (Lara 2 歳 8 ヶ月))。

Lara の発話を観察すると、MCC 獲得より以前に、(17) にみる発話が確認できる。

- (17) a. make ball. (2歳0ヶ月)
 b. let's make a birthday cake. (2歳2ヶ月)
 c. I hafta make a bridge first. (2歳6ヶ月)

動詞 make の後にモノを表す名詞 (ball, a birthday cake, a bridge) が生じている。つまり、形式は[MAKE Obj] であり、意味は「作る」を表している。一方、MCC では、モノではなく、コトとなる出来事 (事象) が動詞 make に後続している [Subj MAKE Obj RP]。つまり、MCC では Obj と RP によって表される事象を引き起こすという意味になり、使役の意味が出てくる。RC は Obj と RP で表された事象を引き起こす手段となる行為が具体的に明示された形式である。

RC と MCC の構文特性ならびに獲得過程を考慮すると、構文の継承について、RC は MCC によって動機付けられていると考えられる。

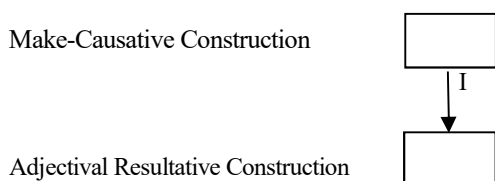


図2

5. おわりに

本論文では、構文文法論の観点から RC の獲得について、CHILDES にある女兒 Lara (1 歳から 3 歳) の発話状況を基に、発達の初期段階で認識される原因事象と結果事象をどのような表現形式を用いて発話するのか調べ、考察を行った。

RC の獲得については、一つひとつの経験を通して、それぞれの結果事象と結び付く手段となる具体的な行為が認識され、使役構文である MCC を基軸として手段を動詞として具現化する RC の獲得に至ると考えられる。RC の形式が、なぜ使役の意味を持ち得るのかについても MCC との継承関係から示される。

今後はさらに、研究調査対象の人数を増やし、RC が頻繁に見られる時期の調査を行っていく。

謝辞

本論文の執筆にあたりまして、査読委員の先生方へ大変貴重な御意見を賜りましたこと心より感謝申し上げます。本研究は JSPS 科研費 18K00668 の助成を受けたものです。

参考文献

- [1] Goldberg, Adele E., (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago, University of Press.
- [2] Goldberg, Adele E., (2006) *Constructions at Work – The Nature of Generalization in Language*, Oxford, Oxford University Press.
- [3] Goldberg, Adele E. and Ray Jackendoff, (2004) “The English Resultative as a Family of Constructions”, *Language*, 80, pp. 532-568.
- [4] Honda Akiko, (2004) “Focalization in Causal Relations: A Study of Resultative and Related Constructions in English”, Ph.D. dissertation, University of Tsukuba.
- [5] Levin, Beth, (2017) “Resultatives and Causatives”, unpublished ms., Stanford University, Stanford, CA.
- [6] MacWhinney, B., (2000) *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk*. 3rd ed. Vol.2. *The Database*, Mahwah, N.J.: LEA.
- [7] Piaget, Jean, (1929) *The Child’s Conception of the World*, (trans. Joan and Andrew Tomlinson), New York: Harcourt, Brace.
- [8] Piaget, Jean, (1930) *The Child’s Conception of Physical*

Causality, (trans. Marjorie Cabain), New York: Harcourt, Brace.

[9] Tomasello, Michael, (2003) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

[10] Vendler, Zero (1967) *Linguistics in Philosophy*, New York, Cornell University Press.